

コンピューターによるドイツ語授業

猪 股 正 廣

目 次

1. 現状と展望
2. 発達史
3. ドイツ語学習ソフトの分類
4. 授業の前提条件
5. PCマスター
6. Text-Arbeiter
7. 授業経過
8. 学生の評価

1 現状と展望

ドイツ語教員の国際組織であるder internationale Deutschlehrerverband (IDV) の創立25周年を記念する第10回大会が、1993年の8月2日から7日までの6日間にわたって、ライプツィヒで開催された。そこでは全体講演の他、16のセッションに分かれて、連日盛んに発表と討議が行われたが、一参加者としての筆者の狭い見聞からすれば、その中で特に刺激のかつ活気にあふれた会場のひとつは、「ニューメディアの可能性と限界」Potenzen und Grenzen neuer Medienをテーマとするセッションであった。

ニューメディアと言えば、もちろんビデオ教材なども含むが、大会の発表要

旨の冊子によると、40件の報告のほぼ過半数に当たる21報告は、コンピューターに関するものであった。この傾向は、4年前にウィーンで開かれたIDV第9回大会においても同様であった。すなわち、「教育機器」Technische Unterrichtsmittelをテーマとするセッションの発表要旨18件のうち10報告は、やはりコンピューター絡みだったのである。

このようにコンピューターは、近年、外国語教育の技術手段として、一定の地位を占めたかに見えるが、地方ではその使用環境と使用地域とは、まだ偏在しているとも言える。ライブツィッヒ大会の発表において、たとえばウクライナやウズベキスタンの大学でのコンピューター使用報告例は、本体メモリーの限界もあってか、ほぼ文法ドリル練習に限定されていた印象だったのに対し、マサチューセッツ州の大学でIBM PS/2を用いて開発された「ゲーテの魔王を解釈するマルチメディアモデル」Goethes “Erlkönig” als Interpretationsmodel für Multimedienは、このバラードの文学的、美術的、音楽的解釈を同時に可能にするものとして、即座に参加者の垂涎的となったのである。

まさに、この教材はコンピューターが呼び出した魅力的な「魔王」であった。F. シューベルト (1797-1828) の曲を3人の歌い手で聴き比べることは無論のこと、J.F.ライヒャルト (1752-1832) やC.レーヴェ (1796-1869) の曲を聞くことも、W.スコット (1771-1832) のErl-Kingの英文テキストを参照したり、このモチーフを描いた版画、絵画、素描をウィンドー画面に映すことも思いのままである。それだけに、この教材開発に費やされた時間と労力は、膨大なものであったろうと推測されるのであるが。

さてここで、魔王の国を離れて、足元の現状に目を向けてみたい。我国のドイツ語教育の現場にも、マルチメディア教材に注目している人たちがいる。「ドイツ語教育部会会報」42号には、マッキントッシュ用ハイパーカードによる教材開発の例が紹介されており⁽¹⁾、その他にも日本独文学会の定期研究発表会場の一隅で時おり実演されているように、このスタックを使って自作教材を

作っている例は少なくないようである。けれども、こうしたマルチメディア教材の普及を阻む最大の難関は、やはりソフト供給の問題であろう。言うまでもないことだが、操作機能が多くなるほど、教材作成のコストも大きくなる。また効果の点でも、学習者の知覚器官に各種のメディアをどのように配分すべきかについて、確立した教授法があるわけではない。活字や映像や音響に反応する感覚をどんなに広範囲に刺激しても、学習者はむしろその中のひとつのメディアに集中する傾向が指摘されているからである⁽²⁾。

教材ソフトだけでなく、コンピュータの使用条件や使用形態も現在のところ教育施設によって様々である。

たとえば筆者が見学した麗沢大学では、広いコンピューター室に、扇形を合わせて円形にしたテーブルが5つか6つあって、その上にそれぞれ6台のMac Classic IIと2台のソニー製ディスプレイが載っており、そこでグループごとにコンピューターを操作する学習者達は疑問があれば、両隣の同級生あるいは歩き回る教員に問いかけることができる。

同志社大学では、新キャンパスの情報処理教室で、1988年からコンピューターを使った英語の授業が実施されており、1992年度にはドイツ語も初級クラスと中級クラスを開設したと報告されている。ここでは、日立2020の端末ひとつひとつがホストコンピューターに接続されるスター型ネットワークが形成され、音声と映像は使わないものの、「教師は教師用端末で学生の進行状況をチェックしたり、大画面のディスプレイに学生の解答を表示したりして、様々なコメントを与えることができる」⁽³⁾

都立大学でも、1992年の秋に「AV棟にパソコンを埋め込んだLL教室」が完成し、IBM互換機の日立FLORA 3010を36台使って、1993年からドイツ語授業を試行している。音声データを記憶するために学生用パソコンにも50メガバイトのハードディスクが装着されており、これが「ES-LAN/AXと呼ばれる教育ネットワークシステム」に組み込まれている。「このES-LAN/

AXは、ワークステーション風のデータネットワークとパソコン画面とビデオ映像を統御するLL形のAVネットワークという2つの独立したネットワークから構成され、これによって、「学生がキーボードと格闘しているのを、教師は一人ずつモニターしていく。おかしいところがあれば、ヘッドホーンを通して指導する。最後に問題ごとに学生を指名し、その画面を全員のパソコンに送り、解説を加えてやる」⁽⁴⁾

早稲田大学本部キャンパスには、残念ながら、教師による端末のモニターが可能なコンピューター室はまだ存在せず、こうした試みを実践するには将来の新しいLL設備に期待する他はない。当面は、コンピューター室パソコンのハードディスクに教材をインストールする事も許されず、フロッピーディスクを使って個別に端末に向かう学生の姿を、教師は離れて観察するだけである。

外国語授業でコンピューターを使用する形態として、以上の大学にみられるように、学生がコンピューター室あるいはLL教室に集まるライブラリー方式ではなく、通常教室にコンピューターを運び込み、拡大されたディスプレイ画面を全員が注視する授業持ち込み方式も考えられよう。この場合には、教師は学生と対話し、意見を取り入れながらコンピューターを操作することで、双方向的な授業を行うことができる。しかしこの方法は、20人程度のクラスサイズならまだしも、その倍以上の学生が締めきあっている大学での授業では有効ではあるまい。この点では、設備ばかりではなく、外国語授業に効果的な規模のクラス人数の実現をも待たなければならないのである。

2 発達史

B.リュショフによれば⁽⁵⁾、授業にコンピューターが使われ始めた60年代のアメリカでは、当時の行動主義的心理学の影響もあって、言語教育は専らInstructionであった。そのことがCBI (Computer Based Instruction) あるいはCAI (Computer Assisted Instruction) という初期の頭字語にも反映

されている。外国語授業にコンピュータを利用することを表すのにアメリカでは今日でも、CALIとかCALT (Computer-Assisted Language Instruction/Teaching) と言うことが多い。

外国語授業に使われた60年代のコンピュータは何よりもDrill and Practiceの相手をするトレーニング機械であったが、70年代になるとその反省から、学習者がコンピュータと対話しながら課題を解決し、知識を獲得するプログラムが考案されるようになった。主としてイギリスで使われるCAL (Computer Assisted Learning) は、この流れに立つ呼称と言える。コンピュータによる外国語授業に関しては今でもCALLと略称されるが、その表現は学習者を中心としたコンピュータ使用を目指すものである。ドイツ語での頭字語CUU (Computerunterstützter Unterricht) も、少なくとも現在その意図するところは、この方向にあると言ってよいだろう。

ところで、60年代のアメリカではCAIによるドイツ語教育プロジェクトも始まっていたが、当時はまだパソコンの時代ではなく、大型コンピュータ本体にプログラムされたものを複数の端末で使う方式だった。しかもこれらのコンピュータ用ドイツ語教育プログラムは、主としてそれらが開発された大学で利用されるにとどまった。当時の大型コンピュータの操作性の問題の他に、ソフト開発のコストが非常に高かったことがその原因として考えられる。

けれども80年代にパソコンが普及するとともに、多くのドイツ語教育ソフトが教師の手によって作られるようになり、教科書会社あるいはゲーテ・インスティテュートなどもその開発に乗り出すようになった。ドイツ語教育雑誌Info DaFの調査によれば、1981年から1990年までの間に合計41個のドイツ語学習ソフトが世に出たが、その間一年毎の統計をグラフにすると、ピークは1985年の10個であり、それ以降には漸増傾向が見られない。しかし、その理由は、コンピュータ教材への関心が薄れたためではなく、ひとつにはソフトが市場に出るまでに時間がかかること、さらにはいったん導入されたソフトはなかなか

新たなものと交換されない故であろうと推測されている⁽⁶⁾。

3 ドイツ語学習ソフトの分類

こうして開発されたドイツ語学習ソフトは、利用者がそのプログラムをどう操作するかによって様々に分類されてきた。

まず第一に、先にも引用したB.リュショフは英語でauthoring packageあるいはauthoring programmと、概念を曖昧にしているものを、ドイツ語では整理してAutorenspracheとAutorensystemとに区分するよう提唱した⁽⁷⁾。彼によればAutorenspracheは、プログラムを操作する際に、若干プログラミング言語の知識が必要とされるものであり、Autorensystemは、そうした知識がまったく不要なものである。M.グリュナーもほぼこの分類を踏襲しており、さらに彼の場合には、整理をもう一步進めてAutorenprogrammをAutorensystemと同義と解している⁽⁸⁾。

ところが、近年になってパソコン用学習ソフトが多様化してくると、もはやこの区分では不十分となったのであろうか、前述のInfo.Daf 1992年4月号は、このAutorensystemまたはAutorenprogrammに当たるものをさらに三つに分けて定義した。すなわち、それによるとAutorensystemは、練習問題およびテキストの割り付けや操作の補助手段などを利用者があまり制限されず、自分で決められるソフトであるが、その反面、実際にソフトを動かすまでには比較的時間がかり、コンピューターについてもある程度の予備知識が必要とされる。他方Autorenprogrammは、プログラミングについてほとんど何も知らなくても、練習問題を設定できるが、その範囲はソフトが前もって指定するパラメーターの枠内にとどまり、与えられた練習問題のパターンを修正することはできても、新しく作ることはできない。Turnkey-Programmとなると、もっと簡単で、文字どおり鍵を回すだけで入居可能な建物のように、完成品として即座にソフトを使えるけれども、プログラムに変更を加える可能性はほ

とんどなくなる⁽⁹⁾。

ドイツ語学習ソフトの利用者にとっては、コンピュータに関する知識よりも練習の中身のほうが重要なことから、AutorensystemよりAutorenprogrammが、またそれよりもTurnkey-Programmが歓迎されるのは申すまでもあるまい。実際、Info Dafが収集調査した1980年から1990年までのドイツ語学習ソフトの数もこの順に多い。しかし、この分類法はInfo Dafが、ドイツ語学習ソフトを紹介する上で、利用者の便宜をはかって採用したもので、コンピュータによるドイツ語授業に興味を持ち始めた者にとって、購入を検討する際の目安にはなっても、ソフトの機能ひとつひとつに注目する立場からすると、その分類自体にあまり意味があるとは思われない。なぜなら、たとえば筆者が授業で使ってみたPMマスターやText-Arbeiterも、教師が与えられた練習パターンの中でテキストや解説を書き加えることができるという点ではAutorenprogrammであるとも言えるが、そうしないでそのまま学生に使わせるのであればTurnkey-Programmということになるからである。

以上は操作性による分類であるが、第二に、練習プログラムによる分類があり、その種類は、たとえば「正書法」、「ドイツ事情」、「筆記練習」、「発話練習」など、かなり多岐にわたる。しかし、それらの中で現在のところソフトの数も多く、また実際に使われて特に成果をあげていると思われる領域は、「文法」、「語彙」、「読解法」である⁽¹⁰⁾。この三分野は、もともと文字による練習が効果をあげてきた領域であり、解答もある程度限定されているために、プログラミングも比較的容易であった。コンピュータを使えば伝統的な設問型式——穴埋め、選択問題、並べ替えなど——をより効果的に練習することができたのである。けれども、批判的に見れば、こうした使い方は、多面的に応用できるコンピュータを単なる機械的な詰め込み学習の道具にしてしまったと言えないこともない。今後は、音声マイクやビデオ装置と結びついたパソコンの性能がいっそう向上するのにともない、聴解や読解の受容的能力だけでな

く、表現力の育成をも目指す総合的なプログラムが少しずつつくられていくことになるだろう。外国語習得のために必要とされる練習領域のうち、基礎的なものから応用的なものへと、コンピューターの使用範囲も広がっていくと予想される。

第三に、これらのプログラムを授業でどのように使うかという使用方法による分類も可能だろう。ひとつには、コンピューターを個人学習に用いることが考えられる。必ずしも自習用のDrill and Practiceがよいというのではなく、対話型解説Tutorialがプログラムされたものであれば、授業中のパートナー作業にも適している。もうひとつの使い方として、グループ作業の開始前に、ロールプレーやシミュレーションの背景として、これらを提示することもできる⁽¹¹⁾。そのためには大画面のディスプレイ装置が必要だが、残念ながら前述したように、大学の授業ではクラスサイズと設備の点で、困難が伴うであろう。筆者が実施した授業でも、PMマスターは文法語彙と筆記練習を、Text-Arbeiterは読解法の習得を主目標とするという相違はあったものの、コンピューターの使用形態としては専ら個人学習を主体とせざるをえなかった。

この二つのドイツ語学習プログラムを実際に使用したドイツ語授業について、次にもう少し詳しく述べておきたい。

4 授業の前提条件

コンピューターによるドイツ語授業の試みは、これまで1992年度と1993年度の2年にわたり、早稲田大学商学部の1年生学院クラス（ドイツ語1学院G）において実施した。クラスの人数は92年度が43名、93年度が37名である。彼らが大学で受講しなければならないドイツ語授業は、筆者が担当する火曜日午後と他の担当者による金曜日午後の週2回である。92年度の金曜日の授業は、日本とドイツの文化比較のエッセーやドイツの新聞記事などの読解が中心であったが、93年度には、ドイツで発行されたThemen 1の教科書を使ってコミュニ

ケーション能力の育成に重点をおく授業が行われた。

このクラスの受講者たちは早稲田大学高等学院からの推薦入学者であるから、彼らには大学入学以前にも、既に3年間のドイツ語学習歴がある。彼らが高等学院で履修してきたドイツ語の授業構成は、1年次50分授業が週3回（内1つは視聴覚）、2年次50分授業が週4回、3年次50分授業が週3回、及び選択科目として特に受講した場合には100分授業が週1回あり、教科書は、「学院教員とドイツ人の手になる学院専用の教科書」で、もうひとつの「ドイツ語読解」では、市販の教科書を使う。1年次の視聴覚授業では、「ドイツ人の吹き込んだテープを聞かせ、その内容について独問答のテストがある（記述式、約10分）」。⁽¹²⁾ ある3年次担当の教員は生徒に3分間ドイツ語でスピーチさせ、原稿をタイプして卒業時に記念として贈っているという。このように高等学院では、近年とみに多様な授業法が取り入れられているようであるが、クラスの学生に聴いてみると、「学院で履修してきたのが、ごく普通のドイツ語授業ばかりなので、訳読に強い」と語る者もいれば、「人前でドイツ語を話す度胸はついた」と言う者もいる。

しかし、彼らの多くが共通して指摘するのは、整理された文法知識が自分たちには欠けているのではないかという不安感である。これはおそらく彼らが小テストなどで文法知識を点検されることはあっても、入試がないために、文法体系の全体を総合的に見直さないまま大学に入学してしまうことと無関係ではあるまい。さらにまた、訳読に強いと思っている学生であっても、逐語的な翻訳ではなく、速読したり、必要な情報だけを読み取ったり、段落ごとに論旨を追ったりするとなると途端に無力となることも、これは何も学院クラスに限った傾向とは言えないが、対処すべき課題のひとつである。

そこで、筆者が担当する学院クラスのドイツ語授業の到達目標は、まず前期において、基本的文法知識を整理し、語彙を拡充する。後期において、多様な読解法を知り、目的に応じてそれらを使い分けると、いささか欲張った設定に

ならざるをえなかった。

コンピューター教室については、本学の情報科学研究教育センターの24号館Cルームを、火曜日の授業時間に専有利用できるよう申請してあった。この教室にはIBM5530が20台とNEC PC-9801EX4が20台設置されている。教室中央の通路をはさんで、左右に5列並んだ机に各4台ずつコンピューターが置かれており、いずれか一方の機種だけを使うならば2人1台の操作が、また2つの機種を同時に使うならば1人1台の操作も可能である。ドイツ語教育ソフトもこの環境と到達目標に合わせて2種類を採用した。即ち、NEC用のPCマスターはタイプ練習も兼ねて前期で、IBM用のText-Arbeiterはコンピューター操作に慣れた後期で使うことにしたのである。

もうひとつ授業開始前に解決すべきこととして、教育ソフトのコピーライセンスの問題があった。PCマスターは複製を認めていないので、学生が個人でフロッピーディスク、使用マニュアル、文例集の冊子セットを購入する他はない。けれどもText-Arbeiterはフロッピーディスクが7枚もあり、それだけに値段も480マルク（日本円に換算して3万円以上）と高価であって、学生一人一人に購入させることは困難である。ドイツの教科書会社が販売権をもっているとはいえ、ゲーテ・インスティテュートが開発したソフトなのに、集団使用権が認められていないのはおかしいと考えて、このソフトの製作者本人と販売会社の双方に手紙を書き、ようやく明らかになったのは、ソフト本体の価格の半額に相当する240マルクを追加すれば、集団使用が許されるということであった。しかし、これによってプログラムの集団使用は可能になったものの、不正利用を防ぐために、授業時間以外でのディスク貸出は控えざるをえなかった。つまり学生が自分で購入したPCマスターは授業時間以外にも利用できるので対し、Text-Arbeiterはプログラム内容が数段複雑であるにもかかわらず、きわめて限られた授業時間内でしか練習できなくなったのである。その結果生じた学生からの苦情については本稿の最後で触れる。

5 PCマスター

1993年にバージョンアップしたPC9801用ソフトPCマスターVer. 1. 2.⁽¹³⁾は、前年のVer. 1. 0. と比べて技術的な操作が幾分容易になり、ディスクにコピー防止用のプロテクトがかけられた以外、練習内容についてはほとんど変更がない。初級篇（文法問題集）と中級篇（語彙別問題集）があるが、本稿では授業で使用した初級篇の概略を、一応この新バージョンの操作マニュアルに沿って述べる。

まず、ソフトを立ち上げ、起動画面が現れると、練習者の氏名コード（ローマ字半角文字で8字以内）を入力しなければならない。練習した時間や得点の記録は、以降この氏名コードでファイルに保存され、HOME CLRキーを押して随時それを表示させることもできる。またこの氏名コード入力によって、タイプ練習を前回終了した最後の問題から継続して始められるようになる。次の問題メニュー画面では「①文法別文例タイプ練習」、「②独文法別書換練習」、「③独文法別作文練習」のいずれかを選択する。

大半の学生がキーボードに慣れていない現状では、最初のタイプ練習にかなりの時間を割かざるをえない。授業開始時のアンケート調査によると、このクラスの学生はタイプライターを「一二度使ったことがある」か、「全然使わない」のいずれかであり、ワープロについても92年度は39人中12人、93年度は36人中13人が「一二度使ったことがある」、あるいは92年度の39人中16人、93年度の36人中17人が「全然使わない」と答えている。ワープロを「よく使う」あるいは「時々使う」と答える学生が4人か5人に1人しかいないという状態では、コンピュータによる外国語授業がタイプ練習から始まるのもやむをえないであろう。

しかし幸いなことに、この教材のタイプ練習プログラムには、いくつか優れた点がある。画面にキー配列を表示して、それを見ながら指を動かせば、ブラ

インドタッチで打てるようになるばかりではない。タイプ練習が10段階から成り、キー位置を覚えるための基本練習である第1段階を除き、その他の段階のタイプ練習が同時に冠詞の変化表などの文法問題やドイツ語の基本例文の練習にもなっている。つまり、準備作業の中で、本来の問題集である書換練習や作文練習への移行を無理なく行う工夫が施されているのである。

問題メニュー画面で、「②独文法別書換練習」及び「③独文法別作文練習」を選択すると、次のような課題選択画面になる。

参考表示	《ドイツ語文法書換 選択》		[]
<input checked="" type="checkbox"/> 冠詞・形容詞	8 <input type="checkbox"/> ①簡単なあいさつ等	9 <input type="checkbox"/> ②人称変化sein, haben	
<input type="checkbox"/> ③人称変化規則動詞	<input type="checkbox"/> ④冠詞・人称代名詞	<input type="checkbox"/> ⑤冠詞類・所有冠詞	
<input type="checkbox"/> ⑥不規則動詞	<input type="checkbox"/> ⑦定動詞の位置	<input type="checkbox"/> ⑧数詞 I (基数)	
<input type="checkbox"/> ⑨前置詞	<input type="checkbox"/> ⑩助動詞	<input type="checkbox"/> ⑪副文 (接続詞等)	
<input type="checkbox"/> ⑫過去形	<input type="checkbox"/> ⑬分離・再帰動詞	<input type="checkbox"/> ⑭不定詞・分詞	
<input type="checkbox"/> ⑮完了形	<input type="checkbox"/> ⑯比較級・最上級	<input type="checkbox"/> ⑰関係代名詞	
<input type="checkbox"/> ⑱受動態	<input type="checkbox"/> ⑲接続詞	<input type="checkbox"/> ⑳数詞 II	
<input type="checkbox"/> I 動詞の三基本形	<input type="checkbox"/> II 試験(1)	<input type="checkbox"/> III 試験(2)	
<input type="checkbox"/> IV 試験(3)	<input type="checkbox"/> V 試験(4)	<input type="checkbox"/> VI 試験(5)	
<input type="checkbox"/> VII 試験(6)	<input type="checkbox"/> VIII 試験(7)	<input type="checkbox"/> IX 試験(8)	
選択 [リターン] 終了 [ESC] 記録 [HOME] 参考 [DEL] 暗唱 [F9] 出題順序 [F10] 解説 [HELP]			

このうち「②独文法別書換練習」には、「全文書換」(90点満点)、「括弧内穴埋め」(80点満点)、「括弧内書換」(80点満点)などの問題があるが、「③独文法別作文練習」には、最初に正解例が数秒間表示され(直ちに解答したい場合にはスペースキーで消して)、日本語訳を見ながらドイツ語の例文を入力する「単純作文」(100点満点)だけしかない。同じ問題文が形式を変えて何度も出題されるので、この「単純作文」に達するまでに、学習者は相当、例文に馴染んでいるはずだが、全文を正しくタイプ入力するには、文法及び語

彙の総合力が試されるだけあって、この作文はなかなか額面通りに単純とはいえないようである。この段階を容易にする一助として、課題選択画面でF9を押すと、「問題暗唱モード」となって、キーボードから入力するのではなく、一定時間画面に表示された例文を記憶→それが消去された後に暗唱→さらに一定時間後再び表示された同じ例文を確認、という作業を各課ごとに行うこともできる。

練習で出題されるドイツ語の例文は、単純な構文がほとんどとはいえ、500近くにも及ぶから、これをマスターすれば、少なくともドイツ語を再生産する能力はかなり身につくと期待されるが、授業用あるいは自習用として使う際に、多少の問題が無いわけではない。たとえば、「単純作文」の解答例の語順が文法的に多くの可能性をもつ場合でも、正解には原則として標準的な語順だけが示され、それ以外の語順で答えると、赤い文字で誤りの表示がでる。これを見て、学習者が混乱しかねない。教師が常に居合わせて画面をチェックするわけにいかない以上、正解の幅はもっと広げるべきであろう。

ともあれ、この教材はドイツ文をタイプする練習を中心として構成されているから、テキスト理解のような余剰 (Redundanz) を利用した応用力は、別の教材によって養成しなければならない。その目的に最適だと思われるのが、次に取りあげるText-Arbeiterである。

6 Text-Arbeiter

Text-Arbeiterは、テキスト理解の方法と合成語の知識を与えることに重点を置いたIBM用ドイツ語教育ソフトである。Text-Arbeiter 1⁽¹⁴⁾は教科書Themenからのテキストを、Text-Arbeiter 2⁽¹⁵⁾はそれ以外の出版物からのテキストを練習に利用し、両者とも1990年に発売されたが、1992年には経済分野からのテキストによるText-Arbeiter 3⁽¹⁶⁾も発売された。これら3種類の教材の練習方法は、実例となるテキストを除けばほとんど同じであるが、筆者

の授業では難易度とヴァリエーションを考慮してText-Arbeiter 2を採用した。

以下、内容紹介に代えて、ドイツ語で書かれたマニュアルを翻訳し、編集したものを記す。この日本語訳マニュアルは、学生に配布し、授業中コンピューターの傍らに置いて常に参照するよう薦めているものである。

はじめに

このマニュアルを読んだだけでは分かりにくい場合でも、実際に画面でプログラムを見ると、なるほどと思われることが多い。よって練習の際には、このマニュアルを手元において、いつでも使えるようにしておくこと。

(早稲田大学情科センターでの) Text-Arbeiter の立ち上げ方

IBM スイッチ on

Menu画面で「Dos コマンド」を選び、数字の8キーを入力

↓キーで「英文モードへの切り替え」を反転させ、Enterキーを押す

「システムを切り替えますか(Y/N)?」でYを入力

-Command prompt-が反転しているところで、Enterキー

ドライブにText-Arbeiterのフロッピーディスクを挿入

C:/PS32> の後に a:と入力し、Enterキー(ドライブを変更する)

A:/> の後に、startと入力し、Enterキー

Echo offの後に、Enterキー

↓キーでドイツ語の解説か英語の解説かを選び、Enterキー

同じく、終了の仕方

ESCキーを押し、↓キーでAufhörenを反転させ、Enterキー

A:/> の後に, c:と入力し, Enterキー

C:/PS32> の後に, exitと入力し, Enterキー

↓キーで, Switch to japanese modoを反転させ, Enterキー

日本語モードに戻してから, スイッチ off

このプログラムで一般に使われるキー

F1: プログラム全体の操作法の指示

F2: プログラム個別の操作法の指示

F3: グロサリーの操作法の指示

ESC: プログラムの中止・終了

スペースキー: 次の課題, 次のテキスト

Enterキー: コマンド実行

後退(BS)キーと矢印キー: 入力後の訂正

挿入(INS)キーと削除(DEL)キー: テキストの順序変更

漢字・カタカナキー+a,o,u,s: ドイツ文字 ä, ö, ü, ß

?: グロサリー呼び出し

このプログラムは7枚のフロッピーディスクから成る。1枚目は以下の目次のうち, 1
～1.5に, 2枚目は2～2.2に, 3枚目は3～3.2に, 4枚目は4～4.7に, 5枚目は5 a
～5.5に, 6枚目は5 b～5.10に, 7枚目は6. に相当する。

フロッピーディスク毎のプログラム目次

<テキスト推定>

1. 読解法 1

1.1 仮定 1 (タイトルからテキストを推定)

1.2 仮定 2 (テキストがどう続くかを推定)

1.3 テキスト削減

1.4 複合名詞推定

1.5 文脈からの単語推定

2. 読解法2

2.1 頻出単語

2.2 国際共通語

3. 合成語

3.1 前後綴り

3.2 複合語

4. 〈テキストでの作業〉

4.1 テキスト内容の仮定

4.2 速読

4.3 テキスト理解の補助手段と課題

4.4 文削減・文構成

4.5 文成分に分解

4.6 いずれの要約が正しいか

4.7 合成語の練習

〈テキスト再生〉

5a. テキスト再生 a

5.1 単語の区切り

5.2 暗号文

5.3 単語入れ替え

5.4 文字入れ替え

5.5 挿入語

5b. テキスト再生 b

5.6 穴埋め

5.7 点線テキスト

5.8 行の入れ替え

5.9 文の入れ替え

5.10 一語一語組立て

6. 一節ずつの入れ替え

プログラムの内容

〈テキスト推定〉

読解法 1・2 では、次のことを学習する。

- ・ある種のテキストに特徴的な部分（例えば頻出語）に気づくことで、テキストの概要把握やテキスト構造の単純化が容易になる。
- ・既知のこと（国際共通語、既習語、前後綴りの知識）から未知のことを推定する。
- ・表題やテキストの小部分から、大きな部分あるいはテキスト全体を類推する。

ただし、これらの方法がどこでも有効だなどと誤解せず、個々のテキスト毎にその実効性を検証してみることが重要である。

合成語についても、上に述べたことは当てはまる。語成分が分かれば、複合語の意味を推定できる場合も多い（例、Hochhaus. Gartenstuhl）。しかし、複合語の意味がその語成分の意味と、全くあるいは僅かしか関係しない場合もある（例、Fahrstuhl. Bullauge）。その上、前後綴りは多くの意味をもつ。従って、推定が正しいかどうかは文脈で判断する他はない。

「読解法 1・2」と「合成語」は、テキスト内容を推定する方法と合成語形成の基本知識を提示し、〈テキストでの作業〉でその応用練習を行う準備をする。〈テキスト推定〉は実例を示す部分であり、テキストは Hueber 社の Themen の教科書からとっている。

1. 読解法1（1枚目のフロッピー）

1.1 仮定1（タイトルからテキストを推定）

解説 4つの例で示される表題は、

- ・しばしば明確にテキスト内容を物語る。
- ・紛らわしいこともある。
- ・時には複数の仮定も可能である。
- ・場合によっては内容について何も述べない。

練習 テキスト内容について、今度は自分で仮定を立ててみる。

次の2つのうち、どちらかの方法を選択する。

練習1. コメントなしで行う。

練習2. コメントとテキストの抜粋を読みながら行う。

1.2 仮定2（テキストがどう続くかを推定）

解説 テキストの続きを推定する。

練習 テキストがどう続くか仮定を立て、それを入力してみる。Enterキーを押して、その仮定をテキストの内容と比較する。

1.3 テキスト削減

解説1 従属文：読み易くするためには従属文が省略できることを示す。

練習 従属文を省略しても文意が失われないかどうかを判断する（J/Nを入力）

解説2と3 名詞に前置される修飾句と後置される修飾句：最初に構文を見るとときには、修飾句は無視してもよく、修飾句を見分けることで複雑な文の理解が容易になることを例示する。

練習 名詞に前置される修飾句と後置される修飾句を指定する。

キー操作法：

F1／F3 操作法参照

？ グロサリー

→ 次の頁へ

スペースキー 次の単語へ

Enterキー 印をつける

Endキー 印つけ終了

総合練習 修飾句と従属文を指定する。

1.4 複合名詞推定

解説 複合名詞の作り方についての知識。複合名詞の意味をその語成分から推定する。

- 練習
1. 複合語かどうか (J/Nを入力)。
 2. 複合語の接合部はどこにあるか (スペースキーで移動し, Enterキー)。
 3. 複合語の意味 (仮定した意味を入力し, Enterキーを押して, 正解と比較する)。

1.5 文脈からの単語推定

予備練習: 知らない単語を推定するのに文脈が役に立つかどうかを考える。

キー操作法:

F1/F2/F3 操作法参照

? グロサリー

→ 次に進む

スペースキー 単語を入力

↓ さらに例文を参照

実例解説: 文脈から単語の意味を導き出す方法を4つの例で説明する。

応用練習: 分からない単語の意味を推定する手がかりとなる単語に印をつける。その後、解答と比べてみる。

キー操作法:

F1/F3 操作法参照

? グロサリー

→ 次の頁へ

スペースキー 次の単語へ

Enterキー 印をつける

Endキー 印つけ終了

2. 読解法2（2枚目のフロッピー）

2.1 頻出単語（3つの解説Tutorialとテキストでの練習）

3つのテキストを使って頻出語（複合語の一部も含む）がテキスト理解に役立つことを示す。冠詞、代名詞、前置詞などは頻出語であってもテキスト理解にはあまり役立たないことが解説される。

このプログラムは解説（Tutorial）とテキストから成る。

操作法（F2）：

スペースキー 解説頁とテキスト頁の切り替え

←→キー 次頁・前頁

0（ゼロ） 最初の解説頁に戻る

解説の頁をたどっていくと（Frequente Wörter 1では10/11頁，2では9/10頁，3では14/15頁に），特定の単語に印をつける練習がある（テキストは3頁程度続く）。そこでスペースキーを押して切り替える。その練習では次のキーを使用する。

F 7 解答を見る

Q その頁の印つけ終了

F 1 一般的操作法の指示

F 2 プログラム個別の操作法の指示

←→キー 次の単語へ・前の単語へ

スペースキー 単語に印をつける

2.2 国際共通語（2つの解説とテキストでの練習）

解説1 ハンブルクについての文章をもとに地名などの特定の単語が，地理関係が分かっている場合には，読者にとってテキスト理解の助けになることを明らかにする。

頻出語（あるいは頻繁に複合語を作る語）もテキスト把握に役立つこ

とが示される。

操作法 (F 2) : スペースキーを押して解説とテキストを交互にたどる。Tutorialの8/12~10/12頁で、スペースキーを押してテキストに切り替え、Qのキーを押すと、テキストの内容について (J/N) で答える問題が出る。同じく11/12頁で、スペースキーを押してテキストに切り替え、地名に印をつける。全て印がつけられると、プログラムは自動的に元のモードに切り替わる。そこで次の頁に進むか、終了を選択する。

解説 2 国際共通語の説明

国際共通語の理解は読者の出身と母国語とに関係することが示される。

操作法 (F 2) : Tutorialの11/12頁で、スペースキーを押してテキストに切り替え、国際共通語に全て印をつける。

3. 合成語 (3枚目のフロッピー)

3.1 前後綴り

解説 1 よく使われる16の前後綴りの意味を例文で示す。

練習 その16の前後綴りをそれぞれ10個の例文の中で穴埋め練習する。

練習 同じ10個の例文で前後綴りの意味を指定する。

解説 2 代表的な33の語幹から派生した語を例文で示す。

練習 その33の語幹から派生した語の前後綴りを、それぞれ10個の例文の中で穴埋め練習する。

3.2 複合語

解説 複合語の構成が説明される。

練習 与えられた語成分から、特定の意味をもつ複合語を作る。

練習 3つの練習: 基礎語 (後半の語成分) の穴埋め, 規定語 (前半の語成分) の穴埋め, 基礎語と規定語の穴埋め。
それぞれ10個の文で複合語の穴埋め練習をする。

練習 同じ語成分から作られた二つの複合名詞を、それぞれの意味が解説さ

れた文に正しく配置する。

4. 〈テキストでの作業〉（4枚目のフロッピー）

ここでは、テキスト内容について仮定を立て、テキストの概要を把握し、その理解度をチェックする。

学習者は最初に、練習するテキストを選択するが、随時それを変更することもできる。この練習の目標は、ここで選択したテキスト以外にも応用できる技術と知識とを習得することである。

4.1 テキスト内容の仮定

この練習方法は、知らないテキストについて行うのであれば意味がない。

表題からテキストの内容を仮定してみる。内容に関する3つの記述の中からひとつを選ぶと、その選択がコンピューターに記憶される。続いて制限時間内でテキストを読む。テキストの一節が現れる毎に、自分の仮定が正しいかどうか確認し、間違いが分かれば訂正する。どの仮定が正しいかが最終的に分かったところで、テキストを読むのは中断される。

一度テキスト全体を読んだだけで、どの仮定が正しいかが分からなければ、二度目に読むときには、適切な仮定を立てる手がかりとなる箇所が明示される。

4.2 速読

テキストが一節毎に示される。そのテキスト部分は一定時間すると画面から消える。操作を速くすることはできるが、動きを止めたり、遅くしたりすることはできない。時間制限によってテキストを早く読む練習を行う。それによってテキストの概要を知り、次に精読すべきかどうかを判断することができる。

4.3 テキスト理解の補助手段と課題

どのようにテキストを読むか、補助手段を使うか、課題（A/F）を行うかどうかも含めてここで選択する。

F2キーを押すと補助手段が表示され、その操作法が示される。

キー操作法：

←→	次頁・前頁
T	頻出語の表と回数
1	主要情報
2	キーワード
3	国際共通語
4	名詞
6	前後綴り
7	複合語
8	固有名詞
9	頻出語（ここでは、二度以上テキストに現れる語）
0	補助手段なし
DEL / INS	テキストの余分な部分を消去（例えば国際共通語を表示する場合に、他の部分を見えなくする）。削除キーで消去，挿入キーで元に戻す。
↓ ↑	テキストを単純な基本構造に徐々に削減していく。↓を何度か押して削減，↑で元に戻していく。
A	画面のテキスト毎にその内容について，J / Nで答える問いが出される。答えが正しくない場合には，正解の根拠となるテキスト箇所が明示される。
F	頻出語がテキストの内容に関連しているかどうかをJ / Nで答え，Jaならば，どの単語がそうなのかを判断する（矢印キーで移動し，Enterキーを押して印をつける。

4.4 文削減・文構文

テキストの個々の文を，言語的に正しい単純な基本構造に少しずつ還元し，その後に再構成する。

4.5 文成分に分解

プログラムが選び出した文について，主語（Subjekt），述語（Prädikat），四格補足

語 (Akkusativergänzung), 前置詞補足語 (Präpositionalergänzung), 添加語 (Angabe), 修飾句 (Attribut) などの文成分をそれぞれ表示させる, もしくは自分で指定する。

4.6 いずれの要約が正しいか

与えられた3つの要約のうちいずれが正しいかを選ぶ。4.3の補助手段がここでも提供される(頻出語を除く)。

4.7 合成語の練習

前後綴りの穴埋め練習をテキストで行う。

基礎語(後半の語成分)と規定語(前半の語成分)の穴埋め練習をテキストで行う。

5. <テキスト再生>

ここでも学習者はテキストを選び, 随時それを変更することもできる(4. の<テキストでの作業>とは異なるテキスト)。

しかし, いずれのテキストにも次の11種類のプログラムによる変更が加えてある。それを元通りに復元するのがテキスト再生である。これらのテキストは, 一見不自然であるが, このテキストを再生することによって, 言語的知識を応用し, ドイツ語をあらゆる面(文字, 単語, 行, 文, 節)で考えることができる。また, いずれの場合も読解をチェックすることにもなる。なぜなら, テキストの要点を理解しなければ, 不自然な部分を取り除いたり, 順序を正したりはできないからである。

(なお, 以下の練習では, 自分で制限時間を決める。制限時間がくると, 練習は中断され, 全文の正しい答えを見ることができない)

5a. テキスト再生 a (5枚目のフロッピー)

5.1 単語の区切り Wortgrenzen

単語と単語の間を空けていないテキストに区切りを入れる。

矢印キーで移動し, スペースキーで切れ目に印をつける。

5.2 暗号文 Kodierter Text

テキストを構成する語が全て他の文字に変更されている。それを正しい文字に戻す。

5.3 単語入れ替え Wörtertausch

テキストの中の二つの単語が入れ替えられている。それを元通りにする。

矢印キーでその単語を探し、Enterキーを押す。さらにEnterキーを押して単語を入れ換える。正解の参照はF7キー。

5.4 文字入れ替え Anagramme

文字の順序が入れ替えられている単語を見つけて元通りにする。

矢印キーでその単語を探し、文字キーで正しい綴りを入力する。Enterキーを押すと正解が現れる。

5.5 挿入語 Eingefügte Wörter

テキストに挿入された不要な単語を見つけて取り除く。

矢印キーでその単語を探し、Enterキーを押す。

5b. テキスト再生 b (6枚目のフロッピー)

5.6 穴埋め Lückentext

空欄に単語を入れて元通りにする。

文字キーでその単語を入力し、Enterキーを押す。

5.7 点線テキスト Texttafel

テキストの文字がひとつずつ点線に置き換えられている。点線毎に文字を入れて単語をつくり、元通りのテキストにする。

文字キーで入力し、Enterキーを押す。文字の訂正は←キー、単語の訂正はスペースキー、元のテキストの参照はF7キー。

5.8 行の入れ替え Zeilen ordnen

入れ替えてある行の順序を元通りにする。

矢印キーを使って行を動かし、それからEnterキーを押す。正解の参照はF7キー。

5.9 文の入れ替え Sätze ordnen

入れ替えてある文の順序を元通りにする。

矢印キーを使って文を動かし、それからEnterキーを押す。正解の参照はF7キー。

5.10 一語一語組立て Wort-um-Wort-Aufbau

与えられる5つの単語の中からひとつずつ選択して、テキストを一語ずつ組み立てていく。

スペースキーを押すと次々にそこに入るべき単語が表示される。←キーを押すと直前に表示された単語に戻る。表示された単語でよければ、Enterキーを押す。テキストの参照はF7キー。

6. 一節ずつの入れ替え Abschnitte ordnen (7枚目のフロッピー)

一節ずつ入れ替えてある文の順序を元通りにする。操作法はF2キー。

キー操作法：

スペースキー	別の一節を見る
DEL / INS	削除キーと挿入キーで文の順序を入れ替える
↑ ↓	組み立てたテキストをさらに動かす
F5	残っているテキストを見る
A	途中まで組み立てたテキストの正誤コントロール
F6	元のテキスト参照

7 授業経過

92年度と93年度の授業は、ほぼ同じ年間スケジュールを組み、配布した資料もその時期も同様であり、授業回数については、二十数回の内、92年前期は定期試験を除き11回、93年前期は10回であった。

4月の最初の授業は、通常の教室で行い、そこで授業方法や教材などについて説明した後、先にも少し触れた下記のアンケートに記入してもらった。

授業の参考にするため、次の質問に教えてください。

学部 _____ 学籍番号 _____ 名前 _____

1. タイプライターを使うことがありますか。

よく使う 時々使う 一二度使ったことがある 全然使わない

2. ワープロを使うことがありますか。

よく使う 時々使う 一二度使ったことがある 全然使わない

3. コンピューターでドイツ語を学習することに興味がありますか。

はい いいえ

4. コンピューターでドイツ語の何を学びたいですか（複数解答可）。

ドイツ語をもっと話せるようになりたい

ドイツ語をもっと書けるようになりたい

ドイツ語のテキストをもっと読めるようになりたい

ドイツ語の語彙をもっと増やしたい

ドイツ語の文法をもっと学びたい

その他 _____

5. なぜ、コンピューターで学習したいですか。

面白そうだから

効果がありそうだから

その他 _____

6. いつ、コンピューターで学習したいですか。

授業中だけ

授業以外にもコンピューター室で練習する

自宅で練習する

その他 _____

7. 一台のコンピューターを何人で使いたいですか。

三人以上のグループで 二人で 一人で

8. 自宅に NEC, IBM, APPLE等のコンピューターがある人は、その機種を書いてください。

-
9. その他、授業に関する希望をどうぞ。
-

アンケートの項目3に「はい」と答えた人数は、92年度の回収分39人中38人、93年度36人中31人である。（余談だが、92年度にただ一人「いいえ」と答えた学生は、その後コンピューター授業に非常に意欲的になり、自習時間を使って Text-Arbeiter 2 の全プログラムを練習した上、操作マニュアルについて、筆者の求めに応じて貴重な意見を寄せてくれた。）項目7に「一人で」と答えた件数は92年度 39人中32人、93年度 36人中28人であり、「二人で」はそれぞれ、39人中7人、36人中5人であり、「三人以上のグループで」は39人中1人、36人中3人である。項目8で自宅にコンピューターがあると答えた件数は、39人中10人、36人中7人であり、ほとんどがNEC系であった。

第2週目の授業では、まとめて購入したPCマスターを学生に配布し、それを使って24号館Cルームでさっそくタイプ練習を開始した。NEC-PCが20台しか無いので、二人一組のペアーとなり、何回か交代しながらキーボードを打つ。5月半ば過ぎの第5週目までにほぼ半数近くの学生が「①文法別文例タイプ練習」から「②独文法別書換練習」へと移ったが、この時期は一年生が大学の環境にも慣れて、ともすれば弛緩に向かう季節でもある。ペアーの一人しかキーボードを打たず、もう一人はディスプレイの画面を眺めたり、文例集の冊子を読むという状態のせいか、教室の雰囲気は雑然としてくる。そこで第6週目には、Text-Arbeiterのマニュアルを配布し、操作の仕方を導入することにした。6月初旬の第7週目からは、NECのキーボードをたたっている学生以外には全員Text-Arbeiterの1枚目のディスクを貸し出して、IBMのコン

ピューターに向かわせる。これでようやく一人1台の授業形態となるが、90分の授業時間の途中で必ず1回はNECとIBMとを交代して使うようにした。

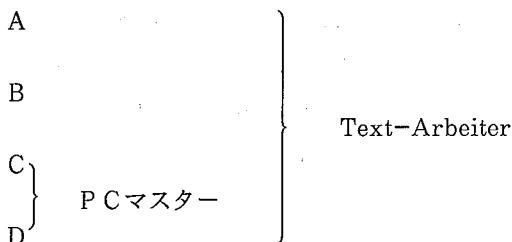
しかし彼らの意識では、PCマスターが練習の中心であり、Text-Arbeiterはいわば待機中の余枝と位置づけられる傾向がある。その理由はPCマスターが教材として単純明快であり、しかも練習結果が記録として残るからであろう。Text-Arbeiterはそれに比して、ディスプレイ画面でのドイツ語あるいは英語での解説Tutorialが日本人学習者には理解し難く、しかも練習した結果の達成度が分からないという難点がある。PCマスターのディスクは学生が自分で保有しているので、コンピューター室のオープン利用の時間や自宅でも練習できるが、Text-Arbeiterはそうはいかないという事情も影響しているのかもしれない。それ故、両者のバランスを取るために、後期の授業時間中はText-Arbeiterに専念し、PCマスターはむしろ自習用とするように学生に告げ、さらに試験と評価方法について次のように公表することにした。

まず、前期試験に代わるものとして、後期の授業時間に毎回5・6人ずつ、PCマスターの進捗度と習熟度を見る個人テストを行う。名簿順に指名された学生が教師の隣りに座り、コンピューターで自分のディスクを立ち上げ、連結されたプリンターでこれまでの練習の記録を印刷し、その場でメニューを見て指定された幾つかの課を実際に練習してみる。教師はその記録と練習ぶりを判定して、もはやPCマスターを卒業してText-Arbeiterに移行すべきか、あるいは今後もPCマスターを続行すべきなら、どこをどのようにと指示する。PCマスターの最終的合格条件は、「②独文法別書換練習」の各課、あるいはその8種類の試験プログラムの得点がいずれも満点の80%以上であることとし、後期最後の授業ではもう一度全員の練習記録をプリントアウトして提出させ、その後の到達度を確認する。

ただし、PCマスターの練習結果が優秀でも、それだけではA（100-90点）、B（89-80点）、C（79-70点）、D（69-60点）の評価基準のC止まりであ

り、それ以上の成績はText-Arbeiterをどれだけ使いこなすかによって決まる。

つまり、



という成績配分になる。おおむね以上の内容を話すと、学生達の顔つきが変わり、俄然真剣な表情でコンピューターに向かい始める（ような気がした）。

後期授業では、Text-Arbeiterを使う学生が7枚のディスクのどの段階を練習したかを出席簿にメモし、授業期間中にできるだけ全体のプログラムを経験するよう奨励したが、実際にそうできたのは数人にすぎなかった。92年度には各人の進度に完全に任せていたが、93年度には3枚目と4枚目のディスクについて、練習方法と操作法とを全員に説明し、二人一組でIBMを使う一斉授業も行った。

どちらの方法がよいのか、年度によるクラスの雰囲気の違いもあり、にわかに断定し難いが、コンピューターによる学習では特に進度差が大きく開いてくるので、授業では何らかの方法でそれを調整する必要があるように思われる。これは、自分のペースで進む個人学習の装置（コンピューター）を用いた教室で、集団的教授法はどの程度まで効果的でありうるのかという、今後とも考えて行かなければならない問題である。

8 学生による評価

92年度の授業最後の時間に、次の5点について学生に記入してもらった。

1. この授業の目標は？
2. その目標の達成度は？
3. 授業の進め方は？
4. 授業の評価をA（100－90点），B（89－80点），C（79－70点），
D（69－60点）で記せ。
5. 授業の感想。

このアンケートの各項目は黒板に書き、用紙はB5版横罫の「早稲田大学試験答案用紙」を利用したが、そこには学籍番号と氏名の欄があったせい（求めなかったにもかかわらず、多くの諸君が名前を記入した）、現代っ子的辛辣さで鳴る学院クラスにしては好意的な批評が多く、それだけに否定的な意見や注文には千鈞の重みがあると思う。そうした部分だけをここに抜粋して書き写し、今後の指標にしたい。

「はっきりいってすべて自分でやるので、進め方も何もないと思う。テストのやり方は、問題にかなり差があるので、良くない。みんな共通の試験にしてほしい。・・・ドイツ語が身につく点ではとても良く、コンピューターを使っていることからして、結構ためになったけど、楽しくなく、自分でやるより、やらされている感じだった」

「だが、IBM教材に関しては、難易度が高すぎて、自分なりの目標がなかなか設定できず、漫然と進めてしまったような部分があった」

「IBMのファイルの貸出などが出来ればもっといいと思う」

「IBMの方は、むずかしいドイツ語の本をただ渡されて、よくわからないままに終わってしまったという感じだった」

「独語の基本的な文法は学院時代にやってあたりまえだと無言で言っているようだったが、復習の意を込めて少し解説してほしかった」

「作業を進めるのに忙しく、文法を勉強したという感じは充分ではない。ディスクの進めなければならない量がとても多く、大変であった（早すぎる）。
・・・教室（コンピューターの数）はもう少し広く、数の多いところにして、12時30分頃に教室につかないと座れないということをなくしてもらえばよいと思う」

「しかしIBMが急に難しくなったので、IBMにいく時に全体的にクラスのやる気が半減した気がする。もう少しIBMのテキスト内容を考えてみたほうが良かったのではないかと感じた」

「常にドイツ語に触れていることは出来たが、授業としては若干物足りなかった」

「一人で使っている人より二人の方が進み方は半分だし、IBMもNECもみんながやりたいときはいっしょなので、来年は今日は何番から何番までNECをやって残りはIBMと指定し、それを1授業またはその半分で交代させるという方法もあると思う」

「授業中は黒板を使ってもう少し詳しく文法を学びたかった。IBMの教材は少々難しすぎると思う」

「かなり個人差があったと思うので、ある時期ごとのディスクの提出などが必要だと思う」

以上のように、受講者の不評はとりわけIBM用のText-Arbeiterを使った授業に集中したが、確かに、この教材にはヴァリエーションに富んだテキストと練習が含まれている（ある試算によれば、テキストと練習の組み合わせは、1480種類にものぼるという）⁽¹⁷⁾ので、これをどのように筋道たてて提示し、授業の効果をあげるかということも、今後考えていかなければならない課題のひ

とつである。また、概して好評だったPCマスターの練習についても、一定範囲をノルマとして学生に課した場合、問題を理解し、考えながら進むのではなく、手元にある文例集を参照して、それを機械的にタイプするだけに終わってしまう例も遺憾ながら見受けられた。そういう場合には、労力の割に文法等の知識は思ったほど身につけていないという結果となり、反省材料にせざるをえない。いずれも学習ソフトをどう使うかという教授法の問題に帰結するが、あわよくば教師に代わりうるかと思ったコンピューターといえども、授業で使用する限り助言者として現場の教師の果たすべき役割は決して小さくはないというのが、この試みを通して筆者の抱いた、落胆と多少の安心の入りまじった感懐である。

(1994年2月)

付記：本稿は早稲田大学特定課題研究助成を得て成立したものである。

- 注(1) 吉田光演：ハイパーカードによるマルチメディア教材について、ドイツ語教育部会会報42, 1992, 52-58頁。
- (2) Bernd Ruschoff：Fremdsprachenunterricht mit computergestützten Materialien. Didaktische Überlegungen und Beispiele. Hueber, 1986, 100頁。
- (3) 鈴木潔：電腦ドイツ語事始め、ドイツ語教育部会会報42, 1992, 60頁。
- (4) 福本義憲：都立大学AV棟のパソコンLL教室、学情DDJ通信4, 1993, 17頁, 19頁。
- (5) この項目は、上記注(2)の8頁以下の内容に依拠している。
- (6) Informationen Deutsch als Fremdsprache, Nr.2, 19. Jahrgang April 1992, Dokumentation zum computergestützten Unterricht in Deutsch als Fremdsprache. Bearbeitet von Lise Desjardins, Bernhard Martin und Kathrin Walti, hrsg.v. Hans-Herbert S. Rakel und Thomas Steinfeld. indicium, 146頁以下。
- (7) 上記注(2)の86頁以下。
- (8) M. グリュナーに従えば、AutorenspracheとはたとえばPILOT (Programmed Instruction Learning Or Teaching) などであり、Info DaFの分類するAutorenspracheとは重ならない。Margit Grüner：Grenzen des Computereinsatzes im DaF-Unterricht. In：Mar-

git Grüner/Timm Hassert : Computer im Unterricht. Voraussetzungen, Möglichkeiten, Grenzen. Reihe : Computerunterstützter Unterricht. München Goethe-Institut, 1991, 35 頁以下。

- (9) 上記注(6)の303頁, 304頁, 311頁。
- (10) Wolfgang E. Schlecht : CALL : Computergestützte Lernprogramme in DaF - Unterricht——Eine Studie am Beispiel der Entwicklung der Lesekompetenz.人文社会科学研究 33, 早稲田大学理工学部一般教育社会科学研究会, 1993, 79頁参照。
- (11) 上記注(2)の47頁参照。
- (12) 相原隆夫 : 学校紹介, 早稲田大学高等学院, 高等学校ドイツ語教育研究会会報1, 1989, 22頁 以下。
- (13) 別所良美/土屋勝彦 : PCマスターVer.1, 2, ドイツ語初級篇文法問題集, 中級篇語彙別問題 集, 郁文堂, 1993.
- (14) Text-Arbeiter 1. Computerprogramm zum Leseverstehen. Text aus dem Lehrwerk Themen. Bearbeitet von Timm Hassert, Hanno Martin und Werner Wolf. Hueber, 1991.
- (15) Text-Arbeiter 2. Computerprogramm zum Leseverstehen. Lehrwerkunabhängige Texte für die Grund- und Mittelstufe DaF. Bearbeitet von Timm Hassert, Hanno Martin und Werner Wolf. Verlag für Deutsch, 1991.
- (16) Text-Arbeiter 3. Computerprogramm zum Leseverstehen. Lehrwerkunabhängige Texte für die Grund- und Mittelstufe DaF. Bearbeitet von Timm Hassert, Hanno Martin, Werner Wolf und Lothar Jung. Verlag für Deutsch, 1992.
- (17) Information Deutsch als Fremdsprache. Nr. 5/6 17. Jahrgang 1990, für Sie gelesen (Ulrike Hofmann-Steinmetz) indicium, 548頁。